

釣れ釣れなるままに

2015年思い出の釣行記 PART. 2

サロマ湖の氷上チカ釣り

鹿島釣狂



釣行月日 2月22日(日)

入釣場所 サロマ湖 テイネイ地区 7:00~10:00

サロマ湖 志撫子地区 11:00~15:00

天気 曇り時々晴 微風

潮位 04:45 89cm

10:53 36cm

17:11 102cm

釣果 チカ 254匹(10cm~18cm) 4,550g

キュウリ 1匹

旭川の赤埴源蔵からサロマ湖でチカを10kg釣ったと連絡が入った。14日に砂川遊水池へワカサギ釣りに行く時に、そのチカを持って行くからというものだったが、その日は勤務があった。私が週末ごとに遊水池に行っているわけではない。それではということで、堀部安兵衛がサロマ湖に討ち入りをかけてみようと私を誘った。

釣り場は、浜佐呂間漁港、テイネイ、芭露、床丹などと考え、仕掛けはチカバリ3号〜4号と、ニシンやキュウリのことも考えて6号を用意した。コマイもありそうだと考えたが、それは虻蜂取らずになりかねないと除いた。運転に加えてテントや暖房器具等の大物は全て安兵衛まかせで、私は、竿と仕掛けとエサを持つだけである。電話でのやり取りの中で、免許証を持つ必要もないというので、酒を飲みながらの殿様釣りになりそうだ。

午前2時半に我が家を出発することにして、早めに寝床にいたが、0時半には目が覚めてしまった。目覚ましは鳴るまでもう少し眠っておこうと目を閉じるが、瞼の裏で氷の穴から身を震わせて上がってくる大チカが焼き付ききどどん目が冴えてきてしまった。床から起き出して出発出来るだけにし、外に出てホテル族をやり出すと、安兵衛の年代物の車が爆音を轟かせてやって来た。2時だった。彼も大チカが鯉のぼりのように連なって釣れてくる様子を思い描いて寝付かれなかったらしい。旭川から案内してくれる源蔵も同じようなものかと思っていたが、彼のマンションに着いた時は、まだ夢の中だった。その夢は、サケ釣り用の大型クーラーが大チカで満杯になったものだったらしい。旭川発の予定より1時間も早く着いてしまった。サロマ湖には暗いうちに着いてしまうのではないかと心配したが、なんだかんだで、テイネイの釣り場に立ったのはサロマ段丘の稜線がくっきりと見えだした時だった。テイネイの釣り場は、新聞報道で、毎週のように記事にされていたこともあり、結構な数のテントが立ち並んでいた。露天組も多かった。

さっそく、3号の狐バリ仕掛けに半分に切ったサシを付けて落としてみる。深さは1.5m程と聞いていたので、市販の7本バリ仕掛けの3本を切り取り、オモリの下に1本を足して5本バリとした。仕掛自体の長さは1m、氷の厚さは30cm。湖底には20cm程の青草が繁っていて、下バリが丁度青草と触れ合うような具合だ。しかし、アタリは皆無だ。新聞報道では撒餌が有効とあったので、イサダを少量ずつ撒いてみるが、さっぱりである。3人して周辺の釣り人に様子を聞いてみるが、未だ釣果なしの御仁ばかりだった。氷の上に山盛りになったチカを想像していたのだが、そのチカが1匹も見あたらないのだ。そんな中、唯一、テントの外で遠軽から来たという釣り人が僅かに10匹ほどのチカを釣っていた。エサは？仕掛は？と詳しく話を伺っていると、「そこで釣ってみれば」と近くにあった穴を指差した。釣れないテントの中に居ても仕方がないと、竿だけを持ってその穴に落としてみると、わずかに竿が揺れて、大チカが釣れてきた。しかし、1時間ほど粘ったが3匹しか釣れなかった。手が凍えてテントに戻ってみると、安兵衛も3匹あげていた。源蔵は、1度のアタリも見えていないという。

今日は安兵衛の大型テントにもぐり込んでいる。大型テントは一度、設置してしまうと、

真に快適である。何より石油ストーブを持ち込むことが出来るので、寒さで動作が緩慢になってしまうことを防げるのだ。氷上釣りはとにかく繊細な作業の連続なので、その温かさは強みになる。何より長竿を使えるという利点がある。安兵衛は、簀子^{すのこ}や浴槽マットまでも持ち込んでいる。疲れた時は横になっていることさえも出来そうだ。

今でも野外でワカサギ釣りをしている人を見かける。その姿を見るとあたかも苦行難行の修行を行っている行者のごときだ。世俗との関わりを絶つためか、通常の世界とは隔離された心境に達しようとしているのだろうか。自分も自然と対峙するときは、そうすべきではないのか思っている節がある。釣りを趣味とするものの宿命なのだとさえ思っている。しかし、現実では安易な方法をとってしまい崇高な思いとは相反する行動になっている

周りでも釣れている様子はないので、このテント内で頑張るしかないか。安兵衛も源蔵も同じ意見だった。何しろ運転は安兵衛に任せてある。私はあくまでも殿様釣りなのだ。それにしてもアタリがない。今までワカサギ釣りをしていた仕掛けを落とせば釣れてきていた状態を続けて来ていたので、この間怠^{きまよ}っことは忍び難い。また、外に出て釣れる穴を探しながら彷徨^{さまよ}ってみた。釣りものの無いのに嫌気がさしていると、テントの外で安兵衛と源蔵が他の釣り人と話し込んでいた。そして、私のところに向かってきた。地元の釣り人の話では、新聞報道にあった浜佐呂間漁港でも、爆釣という記事からはかけ離れた釣果しかないが、ここテイネイよりはマシなようだ。このまま待っても、釣れるようにはならないだろうと腹を括ったようだ。二つ返事で肯いた。

浜佐呂間漁港に向かっていると、芭露を過ぎたあたりの氷上にいくつものテントが並んでいた。志撫子という小さな集落だった。その湾内の小さな漁港に立ち寄って、浜に下りて釣果を聞いて回った。釣り人の周りには100匹ほどのチカが無造作に散らばっていた。中には、不調だったテイネイや浜佐呂間漁港から移動してきた釣り人もいた。3人で目配せし肯きながら、ここで根を下ろすことにした。

釣れた。チカの大きさはワカサギほどのものも多いのだが、大チカも混ざってくる。何しろ5cmほどのチビワカサギを釣ってきたのとはわけが違う。ハりに掛かって、氷の穴から遠ざかろうとする大チカは、丁寧に引っ張り出さなければならないほどの強^{ごうりき}力だ。真っ直ぐに引き上げると空身のハリが氷の縁に引っかかってしまいそうだ。チカの動きに合わせてその反対方向に竿を操ることも、なんだか心を躍らせた。

遊水池のワカサギほどではないにしろ、釣れ続いた。帰り道の運転を考えて、一応2時の上がりを目安にしていたが、3時まで釣り続けたのだ。今日の為に用意した大きなタッパーにチカが満杯になった。ワカサギ釣りの時には煩わしくて使わなかったカウンターのメモリも254を示していた。竿上げの時は、まさに入れ食いの状況になっていたのだが、もう未練はなかった。少し出遅れていた源蔵も150匹は釣れたと顔を綻^{ほころ}ばせた。安兵衛がバケツの水と一緒にチカを玉葱袋にぶちこんだ。私と同じくらいの量だった。大満足だった。安兵衛も源蔵も、よくぞテイネイから移動することを決断してくれたものだ。



エサを付ける時は、メガネをぶら下げて目を凝らす
遠近両用なのだが、近間はメガネを外した方がよく見えるのだ。



大型チカがダブルで



赤埴源蔵と堀部安兵衛



私たちは漁港の近くでテントを張った

帰りの道中、源蔵や安兵衛が、愛煙家で呑兵衛な私に気を遣ってくれる。用意した酒も

残り少なくなってきたチビリチビリ舐めるようにしている私の様子を見て、コンビニに寄るか何度も聞いてくる。必要ないとは言ってはみるが、その言葉に真実味を感じなかったらしい。尿意をもよおしていた訳でもないのに、トイレ休憩だと言って、丸瀬布の道の駅に立ち寄った。私はどうしたかって？ あまり気を遣わせるのもよくないなと焼酎のワンカップを買い込んだねえ。そして、1本の煙草に満足できなかった私は、2本目にも火を着けてしまったんだよねえ。

今日は安兵衛に身を任した殿様釣りだった。焼酎のワンカップに口をつけてほろ酔い加減になっていると、「矢切りの渡し」の鼻歌が出てきた。我ながら古臭いなと思いつつもやはり大漁の時は演歌である。大チカの艶めかしい容姿から艶歌といきたいところでもある。

安兵衛に捧げる「佐呂間の湖畔」

「矢切りの渡し」替え歌：鹿島釣狂

「連れて行ってよ」

「釣れて欲しいよ」

朝焼けの霧に霞む 佐呂間の湖畔

妻の心に 背いてまでも

釣りに生きたい 二人です

「見捨てないでね」

「捨てはしないよ」

北風が泣いて吹く 佐呂間の湖畔

噂悲しい テイネイ捨てて

竿に任せるさだめです。

「どこへ行くのよ」

「知らない志撫子だよ」

揺れながら車が軋む 佐呂間の湖畔

息を殺して 身を寄せながら

今日も釣れ出す 大チカです

旭川の源蔵のマンションに立ち寄った。彼は前回の釣行で捌いて冷凍したチカを持たせてくれた。1匹1匹丁寧に背割りをして開きにしてから中骨を取り除いたものだった。そして、その捌き方を手術用の手袋をつけて実演して見せてくれた。

帰宅してから私の釣果を量ってみると、2kgの秤の針が振り切れてしまった。3度に分けて量ってみると合計4,550gだった。次の日、職場の二人の女性職員に500gずつをお土産にして渡した。そして、弁当にしていた大チカの天麩羅に舌鼓を打っていると、

その捌き方が分からないという。職場の包丁は切れそうもないので、机の中にあつたカッターナイフを使って、実演して見せた。その様は源蔵と全く同じものだった。



釣果は2キロを1周して針が振り切れてしまった。3回に分けて量った。